

フィジー語の3つの動詞構造

岡本 進

(東京外国語大学大学院)

0. はじめに

標準フィジー語¹ (以下フィジー語) の他動詞は、動詞語根に他動詞派生接尾辞 *-Ci*, *-Caki*² を付加することで派生される (Schütz 1985: 132)。 (1) は *-Ci* の付加された例である。これらの接尾辞は、三人称単数の目的語標示 *-a* と融合し、*-Ci-a* > *-Ca*, *-Caki-a* > *-Caka* という形式になる (Schütz 1985: 132)。普通名詞 (人名、地名、代名詞以外の名詞) は冠詞 *na* (異形態 *a*) と共起する³ (Milner 1956: 21)。

(1) e laga-*ta na* sere na gone
3SG sing-CA ART song ART child 「子供は歌を歌う」 (Schütz 1985: 150 を基に発表者作例)

しかし、*-Ca*, *-Caka* が欠如しているにも関わらず、目的語をとっているような動詞文が存在する。そのうち、(2) は目的語に冠詞が前置する例、(3) は目的語の冠詞が欠如している例である。

(2) e laga *na* sere na gone
3SG sing ART song ART child 「子供は歌を歌う」 (Schütz 1985: 150 を基に発表者作例)

(3) e laga sere na gone
3SG sing song ART child 「子供は歌を歌う」 (Schütz 1985: 150 を基に発表者作例)

本発表は、上で示した3つの動詞構造⁴の相関関係を考察することを目的とする。以下、(1) のように *-Ca*, *-Caka* が付加される動詞構造を「接尾辞形」(区別する必要がある場合には、*-Ca* の付加されたものを「1音節接尾辞形」、*-Caka* の付加されたものを「2音節接尾辞形」)、付加されない動詞構造のうち(2)を「冠詞・ゼロ形」、(3)を「無冠詞・ゼロ形」(まとめて言及するときは単に「ゼロ形」)とする。

なお、本発表では、主語を「述語の拘束代名詞と人称・数において一致する(前置詞を伴わない)名詞句」と定義し、目的語を「主語以外の(前置詞を伴わない)名詞句」と定義する。例文の表記は標準フィジー語の正書法に倣っているが、形態素境界を見やすくするため、長母音は母音を連続させて記す。

¹オーストロネシア語族、東マラヨ・ポリネシア語派、オセアニア諸語、基本語順は VOS (Ethnologue: <http://www.ethnologue.com/language/fij> 最終閲覧日 2015/10/09)。

² *-Ci*, *-Caki* の *C* は子音を表し、現れる子音は動詞ごとに語彙的に定められている (Milner 1956: 27)。Schütz (1985) や Aranovich (2013) などはこれらの接尾辞を他動詞派生接尾辞とみなし、TR というグロスを付している。一方、Kikusawa (2000: 40-41) はこれらの接尾辞は統語的他動性を反映していないとしている。本発表はこの問題について十分に議論できないので、それぞれ三人称単数目的語標示も含め、CA, CAKA というグロスを付す

³ 本発表では ART (article) というグロスを付す。冠詞の機能は本発表の結論に関わるが、考察が不十分であるため、稿を改めて議論する。

⁴ 動詞の接尾辞の有無と目的語の冠詞の有無を同時に考察するため、動詞と目的語をひとまとまりにして「動詞構造」と言及する。

1. 先行研究

先に設定したそれぞれの動詞構造について、Milner (1956), Schütz (1985), Aranovich (2013) での扱いを見る。本発表は標準フィジー語に関するものであるが、必要に応じて Dixon (1988) による Boumaa 方言の記述も取り上げる。

1.1. 接尾辞形

接尾辞形は、動詞語根に他動詞派生接尾辞が付加される構造である。上述の通り、他動詞派生接尾辞 *-Ci*, *-Caki* は三人称単数の目的語標示 *-a* との融合で、*-Ca*, *-Caka* という形式で出現し、動詞によってはどちらの接尾辞も付加されうる (Schütz 1985: 132- 134)。

1 音節接尾辞形と 2 音節接尾辞形で異なる意味役割の目的語をとる動詞がある (Milner 1956: 89, Schütz 1985: 137- 139)。本発表ではその中でも数の多い、移動動詞と放出動詞を対象とする。それぞれの目的語の意味役割は表 1 のようにまとめられる。

表 1: 1 音節接尾辞形の目的語と 2 音節接尾辞形の目的語の意味役割

	1 音節接尾辞形の 目的語	2 音節接尾辞形の 目的語
移動動詞 (verbs that refer to motion)	終着点 (destination)	随伴者 (accompaniment)
放出動詞 (verbs of emitting or projectiong)	終着点 (destination)	道具 (instrument)

(カッコ内は Schütz 1985: 137- 139 による記述)

(4) は移動動詞の例、(5) は放出動詞の例である。それぞれ a, b, c の順に、自動詞文、1 音節接尾辞形、2 音節接尾辞形の例を挙げる ((4), (5) は Schütz (1985: 138- 139) を基に発表者が作例)。

(4) a. e aa cici b. e aa cici-*va* *na* kuila c. e aa cici-*vaka* *na* kuila
 3SG PST run 3SG PST run-CA ART flag 3SG PST run-CAKA ART flag
 「彼は走った」 「彼は旗に向かって走った」 「彼は旗を持って走った」

(5) a. e aa viri b. e aa viri-*ka* *na* polo c. e aa viri-*taka* *na* polo
 3SG PST throw 3SG PST throw-CA ART ball 3SG PST throw-CAKA ART ball
 「彼は投げた」 「彼はボールに向かって投げた」 「彼はボールを投げた」

1.2. 冠詞・ゼロ形

冠詞・ゼロ形は動詞語根に *-Ca* も *-Caka* も付加されない構造である (6)。

(6) e dau cola *na* buka
 3SG HAB carry ART firewood 「彼は薪を運ぶ」 (Schütz 1985: 149)

すべての動詞でこの構造が許されるわけではなく、*gunu* 「飲む」のような動詞では不可能である (Schütz 1985: 151)。Boumaa 方言でも限られた意味タイプの動作動詞にしか冠詞・ゼロ形は現れず、傾

向として、接尾辞形は *realis* の事態に (7)a、冠詞・ゼロ形は *irrealis* の事態について言及するのに用いられる (7)b (Dixon 1988: 203- 204)。

- (7) a. au aa bili-*ga* a motokaa yai b. era sa bili a motokaa mayaa
 1SG PST push-CA ART car this 3PL ASP push ART car that
 「私はこの車を押した」 「彼らはその車を押している」 (Dixon 1988: 204)

1.3. 無冠詞・ゼロ形

無冠詞・ゼロ形は動詞語根に *-Ca* も *-Caka* も付加されない構造である (8)。目的語の冠詞が欠如しているという点において冠詞・ゼロ形と異なる。Dixon (1988: 50) と Aranovich (2013: 479- 480) はこの構造を名詞抱合とみなし、他動詞派生接尾辞の欠如をその特徴の一つとして挙げている。

- (8) eratou gunu yaqona
 3PA drink kava 「彼らはカヴァを飲む」 (Milner 1956: 25)

2. 問題提起

冠詞・ゼロ形や無冠詞・ゼロ形は、接尾辞形と異なり、*-Ca*, *-Caka* が欠如している。そのため、目的語の意味役割が 1 音節接尾辞形の目的語のそれに対応するのか、あるいは 2 音節接尾辞形の目的語のそれに対応するのかは不明瞭である。

- (9) a. 冠詞・ゼロ形: na polo = 終着点? 道具?
 au aa viri na polo
 1SG PST throw ART ball
 「私はボールに? / ボールを? 投げた」
 b. 無冠詞・ゼロ形: polo = 終着点? 道具?
 au aa viri polo
 1SG PST throw ball
 「私はボールに? / ボールを? 投げた」

しかし先行研究では、kana「食べる」、gunu「飲む」など、1 音節接尾辞形のみを持つ動詞についての記述が中心的で、1 音節接尾辞形と 2 音節接尾辞形を両方持つ動詞については記述されていない。ゼロ形の目的語の意味役割が、1 音節接尾辞形の目的語と 2 音節接尾辞形の目的語の意味役割の両方に対応し得るのか、あるいは片方にのみ対応するのかについて記述している研究は、管見の限りでは見当たらない。

本発表では、ゼロ形の目的語の意味役割は 1 音節接尾辞形・2 音節接尾辞形どちらの目的語のそれに対応するのかという問題を明らかにする。

3. 調査

本節では、1 音節接尾辞形と 2 音節接尾辞形を両方持つ移動動詞と放出動詞において、ゼロ形の目的語の意味役割は 1 音節接尾辞形・2 音節接尾辞形どちらの目的語のそれに対応するのかという問題を扱う。

この問題を明らかにするため、フィジー語母語話者 LG(男性、1962 年生まれ、スバ出身) と SG(女性、1962 年生まれ、スバ出身) に面接調査を行った。調査は 2015 年 7 月に行い、同年 8 月に追加調査を行った。発表者が用意した冠詞・ゼロ形と無冠詞・ゼロ形の例文を提示し、同じ動詞の 1 音節接尾辞形もしくは 2 音節接尾辞形どちらの文に対応するかを聞いた。調査では Schütz (1985: 138- 139) に挙げられている動詞のうち、移動動詞 18 個 (表 2)、放出動詞 7 個 (表 3) について調査した。

表 2: 移動動詞

1. lako-va	go-for it	10. rido-va	hop-over it
lako-vaka	go-with it	rido-taka	hop-with it
2. qalo-va	swim-to it	11. cabe-ta	ascend it
qalo-vaka	swim-with it	cabe-taka	ascent-with it
3. sobu-ta	descend-for it	12. qasi-va	crawl-toward it
sobu-taka	descend-with it	qasi-vaka	crawl-with it
4. dromu-ca	sink-umder it	13. yaqa-va	creep-toward it
dromu-caka	sink-with it	yaqa-taka	creep-with it
5. soko-ta	sail-to it	14. vuka-ca	fly-to it
soko-taka	sail it (canoe)	vuka-taka	fly-with it
6. kara-va	pole-to it	15. nunu-va	dive-for it
kara-vaka	pole it (canoe)	nunu-vaka	dive-with it
7. cici-va	run-to it	16. rika-ta	jump-down-on it
cicivaka	run-with it	rika-taka	jump-down-with it
8. kaba-ta	climb it	17. voce-ra	row-to it
kaba-taka	climb-with it	voce-taka	row it (boat)
9. lade-va	jump-over it	18. tido-va	hop-toward it
lade-vaka	jump-with it	tido-vaka	hop-with it

(Schütz 1985: 138 より、一部表記変更)

表 3: 放出動詞

1. vana-a	shoot-at it
vana-taka	shoot-with it
2. viri-ka	throw-at it
viri-taka	throw it
3. ula-ka	throw-at it
ula-taka	throw it
4. kolo-va	throw-at it
kolo-taka	throw it
5. coka-a	pierce (spear) it
coka-taka	spear-with it (spear)
6. rabo-ka	sling-at it
rabo-taka	sling it
7. dia-ka	throw-at it
dia-taka	throw it

(Schütz 1985: 139 より、一部表記変更)

3.1 節で冠詞・ゼロ形、3.2 節で無冠詞・ゼロ形についてそれぞれ調査結果を述べる。

3.1. 冠詞・ゼロ形

冠詞・ゼロ形は移動動詞では許容されない(10)a。しかし、放出動詞では許容される(10)b。

(10) a. *au aa lako **na** kuila
1SG PST go ART flag

b. au aa vana **na** dakai
1SG PST shoot ART gun

「私は銃で撃った／*私は銃に向かって撃った」 (dakai = 道具)

(10)b の dakai 「銃」の意味役割は終着点ではなく道具である。すなわち、(10)b の目的語は 1 音節接尾辞形の目的語 (終着点) ではなく(11)a、2 音節接尾辞形の目的語 (道具) に対応する (11)b。

(11) a. au aa vana-**a** **na** dakai b. au aa vana-**taka** **na** dakai
1SG PST shoot-CA ART gun 1SG PST shoot-CAKA ART gun
「私は銃に向かって撃った」 (dakai=終着点) 「私は銃で撃った」 (dakai=道具)

語彙的に終着点と解釈されそうな場合でも、目的語の意味役割は必ず道具である (12)。

(12) [?]au aa dia na ika
1SG PST throw ART fish

「[?]私は魚を投げた／*私は魚に向かって投げた」 (ika=道具)

3.2. 無冠詞・ゼロ形

無冠詞・ゼロ形は移動動詞でも放出動詞でも観察される。目的語の意味役割は1音節接尾辞形の目的語・2音節接尾辞形の目的語のどちらの意味役割にも対応しうる。どちらに対応するかは文脈による。この点は、前節で詳述した冠詞・ゼロ形とは大きく異なる。

以下、移動動詞の無冠詞・ゼロ形の例 (13) と放出動詞の無冠詞・ゼロ形の例 (15) を挙げる。

移動動詞 (13) の目的語 *kuila* 「旗」の意味役割は、1音節接尾辞形の目的語 (終着点) (14)a と2音節接尾辞形の目的語 (随伴者) (14)b に対応する。

(13) *au aa qalo kuila*

1SG PST swim flag

「私は旗に向かって泳いだ／私は旗をもって泳いだ」 (*kuila* = 終着点 or 随伴者)

(14) a. *au aa qalo-va na kuila*

1SG PST swim-CA ART flag

「私は旗に向かって泳いだ」 (*kuila* = 終着点)

b. *au aa qalo-vaka na kuila*

1SG PST swim-CAKA ART flag

「私は旗をもって泳いだ」 (*kuila* = 随伴者)

同様に、放出動詞(15) の目的語 *polo* 「ボール」の意味役割は、1音節接尾辞形の目的語 (終着点) (16)a と2音節接尾辞形の目的語 (道具) (16)b に対応する。

(15) *au aa viri polo*

1SG PST throw ball

「私はボールに向かって投げた／私はボールを投げた」 (*polo* = 終着点 or 道具)

(16) a. *au aa viri-ka na polo*

1SG PST throw-CA ART ball

「私はボールに向かって投げた」 (*polo* = 終着点)

b. *au aa viri-taka na polo*

1SG PST throw-CA ART ball

「私はボールを投げた」 (*polo* = 道具)

4. まとめと今後の展望

本発表でゼロ形の目的語について明らかになったことを下表に示す。

表 4: 調査結果まとめ (.....部で囲んだ箇所が本発表で明らかにしたところ)

	接尾辞形		冠詞・ゼロ形	無冠詞・ゼロ形
	1音節	2音節		
他動詞派生接尾辞	- <i>Ca</i>	- <i>Caka</i>	—	
目的語の冠詞	+	+	+	—
移動動詞の 目的語の意味役割	終着点	随伴者	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 終着点 or 随伴者 </div>	
放出動詞の 目的語の意味役割	終着点	道具		

まず、冠詞・ゼロ形について述べる。この構造がすべての動詞で許されるわけではないということは Schütz (1985: 151) で指摘されている。今回の調査で、目的語の意味役割にも制限があるということ

が明らかとなった。すなわち、今回扱った範囲に限って言えば、冠詞・ゼロ形は、動詞が放出動詞でなおかつ目的語の意味役割が2音節接尾辞形の目的語(道具)に対応する場合にのみ許される、といえる。

ただし、冠詞・ゼロ形の成立条件は複雑であるようだ。Schütz (1985: 151) は、冠詞・ゼロ形は *gunu* 「飲む」では見られないとしている。しかし、コンサルタント SG によれば、(17)a は不自然であるが、(17)b のようにある程度長い発話であれば不自然でないという。

- (17) a. [?]au aa *gunu na* tii b. au aa *gunu na* tii ni bera na cakacaka
 1SG PST drink ART tea 1SG PST drink ART tea before ART work
 「私はお茶を飲んだ」 「私は仕事の前にお茶を飲んだ」

(17)a と (17)b の違いは何に起因するものなのかについては今後の課題とする。

次に、無冠詞・ゼロ形について述べる。無冠詞・ゼロ形は移動動詞でも放出動詞でも観察された。目的語の意味役割は1音節接尾辞形・2音節接尾辞形どちらの目的語にも対応する。

Aranovich (2013) や Dixon (1988) では無冠詞・ゼロ形を名詞抱合であるとしている。無冠詞・ゼロ形を名詞抱合とみなすか否かについては、今後の研究の課題としたい。

今後の研究対象の1つとして、*-Ci*, *-Caki* の機能の再考があげられる。ゼロ形が目的語を取っていることから、Kikusawa (2000: 40-41) が指摘しているように、*-Ci*, *-Caki* は統語的他動性を反映していないとするのが妥当であろう⁵。

3つの動詞構造の意味的・機能的な差異については本発表の考察の対象としていない。コンサルタント SG によれば、接尾辞形は過去の事態に (18)a、無冠詞・ゼロ形は現在の事態について述べるのに使われやすいという (18)b。

- (18) a. au aa *kani-a na* madrai b. au kana madrai tiko
 1SG PST eat-CA ART bread 1SG eat bread CNT
 「私はパンを食べた」 「私はパンを食べている」

今後は、実際の談話を分析するなどして、3つの動詞構造の使い分けを明らかにする必要があるだろう。

略号一覧

1,3 first, third person 1,3 人称 / ART article 冠詞 / ASP aspect アスペクト / CA -Ca / CAKA -Caka / CNT continuous 継続 / HAB habitual 習慣 / PA paucal 少数 / PL plural 複数 / PST past 過去 / SG singular 単数

参考文献

Aranovich, Paúl (2013) Transitivity and polysynthesis in Fijian. *Language* 89 (3). 465- 500. / Dixon, R. M. W. (1988) *A grammar of Boumaa Fijian*. Chicago: The University of Chicago Press. / Kikusawa, Ritsuko (2000) Transitivity and Verb Forms in Fijian. In: Ritsuko Kikusawa and Kan Sasaki (eds.) *Modern Approaches to Transitivity*, 29- 51. Tokyo: Kurosio. / Milner, G. B. (1956) *Fijian Grammar*. Suva: Government Press. / Schütz, A. J. (1985) *The Fijian Language*. Honolulu: University of Hawaii Press.

⁵ Kikusawa (2000: 41) は、*-Ci*, *-Caki* は自動詞主語あるいは他動詞目的語の意味特性 (semantic feature) を反映しているのだとしている。紙幅の都合上、詳細は割愛する。